027
99
2

愛知県立図書館

027
59
2

[illegible]

遺憾[illegible]

[illegible]

[illegible]

永く伝んと願みて[illegible]
一集冊を著すこの志のあつき
極て歳の上ることを新ならしめ
きて此等世代をのおける
指を[illegible]一一此伝記士の小祥忌
あらて集院[illegible]
を[illegible]集[illegible]代[illegible]辞
[illegible]と能[illegible]
て[illegible]

野[illegible]人[illegible]

[illegible]元初冬　清水月坡

[illegible]

隨流舎一遍遺稿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さゞなみや降をしみするもりくち
つゝじ生けて出して春の山
よ御ふく流しやりぬ花の水

翻然岳呑海庵にて

不盡掠る目の下なる雲一つ郷
さ法もや咲もうそいしく折れは
蘇てのくも借れつゝをしれ左蝶来
花るくけれ人をとる借来る

馬に踊くれて去りくらて起りて
足あとの清を劫してある桜か手
紙雛の袖のつ出して唐のこし
畑うちやきたもなくのう海さつ不
うし味湯いふうとれ池をや桃の花
木馬のつあるゝ蝶の家出揚して

何かしふる

水うつもひろとのさしぬ月と去

明星の光おさまる枕かな　卯卿

さゝら傍たつ宿らぬ蕪子な

色よくい越しなから　法青堂

隠み入るかきの下やあふき　秋依

古ふみたうて鶯の宿まつはれて氷

湯壺も命なしふゆる残り菊

あらへつまされよ秋雨て　宋古る

狂今年柿のしるへや桜の実

菖蒲湯に入てあんや佐任人

さみだれや鷺の宗隠て猩き

子るてやう捨しいとのあらがふ小

以ま春もおとりたまや桂鶴

待つきるまくありて　りつ子

花ひらぬ秋も降やも宝つ宵

柏の色めて隠る　ほつきうれ

きものとはあしをとるに不二語
の身やすくのあるとあるとも
物をやるるつあまし　作し　酒
おかきくをもいたくるしい雪
すらみ人をとるわけおの　十五日
踏あるく　踏くるる　計　相一葉
身　新るるふるるんゆ新をるるれ

ふ　強る　白髪もあるん　魂　系
ゝるゝ　物　ちるるるくをれ　強白る
るるるるい　咲の　ちるぬ　生代　弟
弟身や　葉のるれをるる　ち　恨の
大　竹をきふ　人を　や　秋の　風
新は　竹　苗　惜　赤し　ゆきめ　雪
るし　後くまゝ　辛　拭きみゝ　二の　身
きちるふく　強る　つきるるる　身　衣

梓の梢もとより隠なき月松かな
言地つゝくつめしあしや身のゆく
木とノありし身はちよりつゝるとは
なきさよふく深き峰よ都と思ひしまで
家に宝へまたまた東やいはれの家の
つるまのゐしくらあまり叢椒
いとく様ふめしくかやてさし深
細なしる鹿なくのとまちのひるま

ゆく水に流れて清や志らの峰
茂るけくつくるも陰に峯なりなまし
うれもなり皇りしき出ねる夜のうちかな
ぬるしつれに出る紀のあき　小六月
堀ほとひに　横白清しろ　石蔵の峰
以翁志
月に華　松か時雨　鈴ひろきうか

結人をかたらひ高き峯に登り
ものの音や深き鐘を人さとるも
雲霧の深きみしらし　恋る　緣

和泉式部

鶯の中なかやあるをしたる　三上山
花もちるそしらるるかなやそ持きい
る鶯のなとと来るを　鶯のこゑ
ら鳴んあき鶯なつるや　里神来

名ゆるに遠侯に新しき仙花
自雨降ぬ　しるさ庵の食うれ
屋さりる　あるはきん事やあ鶴
うち明けつれい　嵯峨生海氣貴
ものや　袖ぬるる　ふるの秋
中ぬよ日のくるやまるくまきる　雲
水をやくるるのこるや　谷のうこ
くらいるかるるうなりく　深雪の雪

ちかしき友多く初百日の夜
余も一遍の懐旧の情おさへて
泪流しく

世の跡あさましかりし有時雨

沐浴

秋来ても寒くしも翁の十夜かな

茶毘奈

けふりや地にしく菊もしらぬ菊

初七

露もれはかれくも袖の深き卯

二七

夜寒さや某の何とはなく雲林亭

三七

水無月残ふきんと涙も流し遠秋紅

四七

ちりあへのって袂ぬらさし某供信

偶日

同よをきて寧静がや屋の銭をかる

五七　相天半白

望日ゆるふ身とゝくるやみての月

六七

情あいて火桶にひたしかゝみ〳〵け

七ゝ

月雲や三十日の雲を法てゝの雲

きのふ迄七ヶの墓参して一遍に安堵
清る者との事まや抄ひ出るも神の
梅彼のしるかるにつゝりし譽る

冬の夜や忍ふを嘯きて去らう〳〵

雀叟

祖父君それよし叶ふ家業の以と傍ら
をとれるを此草を家のひしこゝろ
みゆゐにこそ去にしくの雲の
うち句ひて保伊と共に終る

無係も冬ふの記念にせん梅 先

慈父のいつくしみにそたてられぬ中にも
明くれ世をわするゝなくて祖父母の一跡を
継せよと申せしか此世を去りはてれとも
おもひ出ことを思ひやりてはなかれ侍りてなかる
その世に居らは病をもせなんと語りての
なき数となりてはなけき人の数に入せ
たまひぬる悲しさおさなさや父母順の
相とかはしも生先病死の事ともを
観し侍りて悲哀の百千の涙を
流し侍りぬ

賑ふも見るものゝふゝりや雪の朝　梅后

各哭章

茶書晩

辞を述てさへしき梅の時雨かな　露守

さかゐあつし字知る枝に萩の花　酒気

ふるき事をかれたる夜の時雨かな　方汀

引次ぬ梅入江のさゝなきさの声　春暉

なからしきその袂やかゝる風　一渓

うつされたきぬくしたゝる相生梅　山月

慈母の恨を折るとて恋しきも　子遷

月のさやけさまさるかれや梅の香　竹外

志ゝ賀をもかの宮ゝを神ゝもまもりけり
ゆゝかしきゝ一首を志のへも　遠里

一条兼悼
一條義叔　恒久

其志一朝帰北邙頽齡六二井中来
梅花不識遷謫恨徒向雪窓彩筆

叙位ノ宣旨四十六富外者一梅花百四番
因白井殿之

枯のうゑ花さかぬ木ゝ　蘇舎
うゝ山ゝ人やたゝかゝ山ゝ　素道
冬の梅　鉢植たるふる白ゝ　麦子
なまゝ人ゝ弄あり給し　張大梅
ちゝ形ゝ乃ゝ入ゝ　秋屋
神ゝ詠ゝ　時ゝ　椎ゝ　若葉
ゝ結ゝ　ゝ　ゝ梅の　一所　雑賀
わゝ山の月ゝ　ハや冬枯丹　一節
　　屠之

一鳥

小倉百人一首

梅屋

黙池

岱年

石鼎

一巡若さを計るまでもなく
俤の格うつひもおろそかな

[illegible] 然池
[illegible] 清華
葉の[illegible] 梅宝
申刻[illegible] 木容
人影も[illegible]月計菴 伐彦
みのらぬ[illegible] 百吉

[illegible] 奇舎
なるべく[illegible] 甚翠
炭火[illegible] 飄翁
[illegible] 春舟
まりつぬ傘を一本[illegible] 雪英
[illegible] 月樵
[illegible] 梅通
多ふ[illegible] 兼

右一順おのしるせるかたちのいとをかしきを思ひて
いきうの思ひのふを述ることのくを今さらの歌仙
[illegible]
かく一順をつゝねかゝるかたちにつくりあつめ、
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]　　[illegible]屋

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　百古

[illegible]　　藏六

[illegible]

[illegible]　　石鼎

[illegible]

[illegible]　　月波

[illegible]

[illegible]　　[illegible]山

一説に[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]

関東やそ[illegible]　[illegible]紀[illegible]　一具

一[illegible]

ふ[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]か

[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

日の入ぬ東に秋月の気西にたしつらく
夫や京都にいるゝ鳴呼等幻泡影
かなし世の境なき

餅の宝ちり落る栄花の後の世なき　雲叟

梅居

ちるもの正月たうきめでたき亀の丸　梅先

先考隠池の宝得らるし
こゝろ入侍りし

ちる日記初よのこゝろ宝の番　梅居

右為回忌正月廿一日

秋の吟

蕉翁の言葉随ひとちひさき
世の説をとかしく

惜しき亀や川と流くもさびしの風　雲叟

数々くのみるを偲ぶしや麻衣　梅先

ふつかめの時よ
亡父の笠傍をいとなみ侍て

道の辺ややなもたち結ぶ庭の役け　梅居

…女子大学図書館
20134
昭和26年9月21

京都府立図書館
昭和三年
購入